文化

脱・成長主義！

佐伯啓思さんが フランス文学・思想研究者 王寺 賢太さん と語る ㊤

パリ五月革命から今年でちょうど50年。1968年は、日本で全共闘運動が巻き起こり、米国でも公民権運動が広がるなど、体制や権威への異議申し立てが世界同時的に発生した「反乱の年」として記憶されています。保守主義を掲げる思想家の佐伯啓思さんにとって「68年」はどう映ったのでしょうか。この時期に「思想的な大転換」があったとみる京都大人文科学研究所准教授の王寺賢太さんと語るうちに、「脱・成長主義」との意外な共通項も見えてきます。

（構成・阿部秀俊）

おうじ・けんた　1970年ドイツ生まれ。北九州市と東京都で育つ。パリ西大学博士。京都大人文科学研究所准教授。専攻は、フランス文学・思想、社会思想史。特に18世紀と20世紀の政治・経済思想、歴史叙述を中心に研究を進めている。近著に『現代思想と政治』、『<ポスト68年>と私たち』（いずれも市田良彦氏との共編著）。

佐伯　私は大学（東京大）に入ったのがちょうど68年。入学してすぐの7月初めに、駒場（旧教養部）が無期限ストに入って授業がなくなってしまう。ただ正直、田舎から東京に出てきたばかりで、当時は何が起こっているか理解できていなかった。「三派」だとか、いろんな言葉が飛び交っているけれど、何のことだかさっぱりでね（笑）。王寺さんは、まだ生まれていないでしょう。どうして68年に関心を持ったのですか。

✦ 真理の府への闘い

王寺　私は88年、ちょうど20年後に駒場に入ったのですが、68年の痕跡はまだいろんなところに残っていました。東大では学生が組織する「自主ゼミ」があり、駒場寮もあった。当時流行の現代思想、フランスの「68年の思想」はそんなところで出回っていました。でも生意気な学生だったので、「全共闘世代は嫌い」などと公言していたら、当の全共闘世代のパスカル学者塩川徹也さんを教師に持つことになったんです。

全共闘運動について塩川さんは言っていました。「大学は真理の府である」という前提に対する闘いだった、と。真理を語ることを保証してくれる「特権的な立場」などどこにもない、ということですね。実際、彼らの世代は一生懸命、学生に何かを教えることだけはしないように努めていました（笑）。禁欲的に大学での研究に専念する姿勢を見ているうちに、それが一種の知識人批判、知識人の自己批判にも見えてきた。学者としての自分が何をやっているのか、何をやらされているのかを問うこと。これはとても68年的な態度だと思います。

佐伯　自己批判、自己省察はすごく大事ですね。全面的に正しい知識なんてあり得ない。知識は常に、だれかにとっての真理であり、相対的なものでしかない。確かに、あの時代、一方でそのように考える雰囲気があり、同時に、全共闘は自分たちだけは真理を語っているといっていた。少し後にミシェル・フーコーが、言説というのはすべて権力である。真理さえも「真理性を装った権力」であるという。共感しました。ただ、ここまで来たら終わりじゃないか、という思いもあった。西洋が組み立ててきた知識の体系、科学にしても哲学にしても真理の追究さえも破綻したという感じがしました。

王寺　ポスト68年の難問ですね。以前なら「労働者階級の解放」とか「人間の疎外からの解放」、あるいは「自由・平等の権利の実現」と唱えることも、バラ色の未来をもたらす歴史の進歩を思い描くこともできた。それが不可能になる。どこかに根拠となる真理があり、党なり知識人なり、誰かがその真理を代弁することができるという前提がひっくり返されるからです。現在ある体制を批判するとして、では誰が、何を根拠として、どのように語ることができるのかが鋭く問われるようになる。

佐伯　先ほども言ったように、私は68年に少し「遅れてきた」という意識が強い。運動には関わらず、目の前で起こっていることの傍観者。その実感で言うと、68年はそれほど大きなムーブメントだったとは思えない。

過激にやった連中もかなりいたけれど、深く考えていたわけでもない。政治問題には多少、敏感であったけれど、大半は人間関係、友人関係で運動に入っていった。「佐伯、一緒にデモ行こうよ」なんて誘われる。ようするにピクニックですよ、8割方は。ただ、人生をかけた2割もいましたね。

王寺　私も大方は「お祭り騒ぎ」だと思っていました。

佐伯　だいたいあの時代、日本は超高度成長期。労働者はどんどん豊かになっていく。そんな時代に革命なんか起きるはずがない。ユーミンの「『いちご白書』をもう一度」じゃないけれど、みんな4年生になったら髪を切って就職活動に向かったんです。大半は企業の管理職になる。革命はどこにいった、あれは何なんだったんだ、といいたい。おまけに、50年たった今もノスタルジックに語ったりする。

68年、豊かな戦後への反乱 × 体制に寄る「革命家」に落胆

✦ 暴力に走る理由

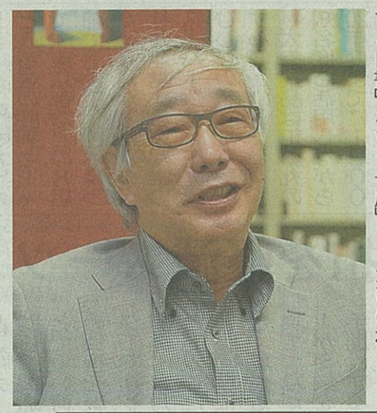
王寺　68年が今でも重要なのは、それがまさに「豊かさ」のなかで生まれた運動だったからではないでしょうか。

スローガンの一つに「戦後民主主義批判」がありました。みんなが良き「市民」、良き「勤労者」になることを求める体制への異議申し立てですね。戦後民主主義は、権利の平等とともに強く画一化をもたらす体制でもありました。しかしこの頃、工業生産中心の資本主義は変化し始めていて、商品の価値の源泉を「労働」だけに見いだすことも、労働組合を動かして政治運動を左右することも、大量の雇用を確保することも難しくなってきていた。その時、いったい自分が何者になるのかも分からない「未決定」な存在である学生をかけた。

それがピークに達するのが「68年」である。それは、「革命」を唱える過激な学生運動や穏健な党派層や市民参加のデモなどが沌（とん）状態であったが、結局のところ「68年」は、何を焦点にしていたのかよくわからない連合赤軍事件や内ゲバ殺人へとなだれ込んでいきつく。そこで戦後日本の大きな運動は終焉する。過激な左翼はレッテルとしての「サヨク」になってしまった。

では「68年」は思想的にどうだったのだろうか。面白いことに、フランスの「68年」は、いったい

京都大の「立て看」規制が始まった直後の5月2日。68年的な風景が残る京都大・西部講堂前で語り合う佐伯さんと王寺さん（京都市左京区）＝撮影・船越正宏



佐伯さんの深掘りコラム

ポスト全共闘の「左翼」とは

「68年」は世界的な学生反乱であったが、日本には、日本独特の事情があった。それは、日本の「68年」は、いわゆる「60年安保」が生み出した学生主体の左翼運動と切っても切り離せない、ということである。60年安保は、共産党の指導から離れた全学連の学生が主役となったが、国会突入などの過激な運動とその失敗から、その後、運動方針をめぐって分派の対立と主導権争いを続けてい

生が、戦後体制に強烈な異論を唱えたのが、あの運動だったと思うんです。

日本の68年には、極左の暴力主義の悪いイメージがつきまとってきました。でも、日米安保のもと、民主主義と平和と豊かさを享受していた「戦後」の日本は、当時まぎれもなくベトナム戦争の後衛基地だった。ちょうど返還が争点になっていた沖縄には、その後も米軍基地が集中していきます。極左が暴力主義に走ったことには、単なる幼稚さでは済まない理由があったはずです。核抑止の下で、誰も大義に命を賭けることができない時代に、あえて武装闘争に訴えるという側面もあった。だからこそ陰惨な結果にもなったのですが、後から来た者の特権でそれを嘲笑する気にはなれないんですね。

佐伯 世代を代表するわけではないけれど、そこまで言ってもらうと、ありがたい。誤解を恐れずに言えば、私が全共闘に共感できる部分の一つに「暴力主義」があるんです。戦後民主主義が持っている欺瞞、あるいは議会主義の欺瞞、高度成長の経済繁栄の欺瞞に対し、暴力行動の必要を訴えた。この社会から究極的に「排除」された少数者がいるとすれば、民主政による政治システムでは救済できない。体制そのものに攻撃を加えるほかないのだ、と。

確かに、江藤淳（1932～99年）が言ったように、あの運動は「革命ごっこ」だった。しかし、その後に来たのは、だらだらと続く「改革」の時代です。大企業に就職した全共闘世代が社会の中心になった90年代、かつての「革命家」はすっかり体制に取り込まれ「改革」にいそしむ。戦後体制にべったり寄り添った世代が左翼を気取るさまはまったく共感できません。

王寺 でも、佐伯さんの「脱・成長主義」や保守主義も、私にはポスト68年の思想に見えます。経済によって社会を説明するのではなく、社会こそが経済を支えるという観点から、資本主義を批判しようとする点で。進歩主義批判としての保守主義ももちろんです。

ポスト・モダン思想を生み出したが、この思想から出発したポスト全共闘の世代の人たち（王寺さんもその一人だろう）は、日本の「68年世代」にはかなり批判的なのである。ところが、そのうちに、社会そのものが高度な消費社会、どんな情報でも流通するSNS社会、フェイク・ニュースの社会、つまり「ポスト・モダン」風の社会になってしまった。果たして、この時代に「左翼」とは何なのだろうか。王寺さんたちの世代はたいへんな難問の前に投げ出されているように思われる。

に達するのが「68
れは、「革命」を
生運動や穏健な無
加のデモなどの混
が、結局のところ、
を焦点にした闘争
わからないまま、
内ゲバ殺人へとゆ
戦後日本の左翼運
過激な左翼は、ム
「サヨク」になって
は思想的に何を残
か。面白いことに、
68年」は、いわゆる

京都大の「立て看」規制が始まった直後の5月2日。68年的な風景が残る京都大・西部講堂前で語り合う佐伯さんと王寺さん（京都市左京区）＝撮影・船越正宏

第四十三期 碁聖戦

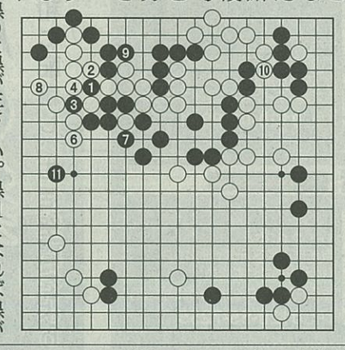
戦局 本回 第1局（78—102）黒77は再掲

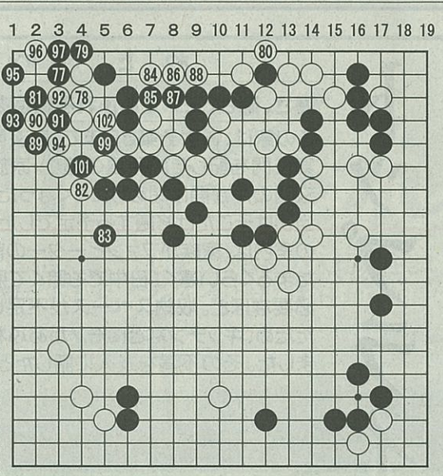
白 八段 本木克弥（日本棋院・22歳）
黒 九段 小林覚（日本棋院・59歳）（6日半コミ出し）

持ち時間各3時間
消費 白2時間55分 黒1時間59分

本木の踏み込み

【第五譜】 黒77のハサミツケがうるさい。白78は「参考図黒1と切って分断すべきでした」と指摘する（黒5＝1の下ツグ）。黒9と黒が生きると、上辺の白が薄く、白10の黒二子取りぐらい。黒11となれば黒が厚く、やれそうだという。





白84のオキが黒を取りにいった度胸のいい踏み込みだった。白80と抜いてあるため白88でワタッている。黒89のトビに白90とワリ込み、白94でコウだ。黒99の切りに本木は、白100（91）とツイでコウを解消する。黒101抜きに白102と切って攻め合いである。

（田中 章）

98（90）コウ取る、100（91）ツギトビはごく自然な手だったが、安斎伸彰七段は「参考図黒1と切って分断すべきでした」と指摘する（黒5＝1の下ツグ）。黒9と黒が生きると、上辺の白が薄く、白10の黒二子取りぐらい。黒11となれば黒が厚く、やれそうだという。

第四十三期 棋王戦 五番勝負

第5局

先手 棋王 渡辺 明
七段 永瀬拓矢（2勝2敗）

消費（▲2時間▲3時間1658分）

指し手98手 持ち時間各4時間

【第九譜】（図は△2二桂まで）

▲3五銀12 △3四桂1
同 銀 △4五銀1
▲7三歩成11△同 桂8
同桂成 △4七歩
▲5九玉 △7七歩
同 金2 △3七角1
▲6八玉3 △4八歩成2
▲8二成桂3△3四銀3

先手、勝勢へ

将棋会館では、午後5時から大盤解説会が開かれた。開始1時間ほど前から列ができはじめ、30人ほどの方が並んでいた。ここ1年は、これまで以上に将棋が注目されている。解説を担当する阿久津主税八段は「棒銀を見せてから、右玉にした渡辺棋王の指し方が老練だった」と話した。

△2二桂（図）は勝負手。▲2三銀不成は△2八歩▲同飛△1七歩成で、勝負されるのが嫌らしい。

永瀬はおやつのバナナを食べて、席を外した。バナナの入った袋を持って戻ってくる。永瀬自身が事前に準備していたようだ。吸収が速く栄養補給にいいので、今回の5番勝負ではよく食べていた。苦しい形勢だが、まだあきらめていない。

渡辺は手で膝をたたいたり、「いや！」とうめいたり落ち着かない様子を見せる。しかし、指し手は冷静だった。▲3五銀と受けてから▲7三歩成と攻める。後手の飛車は働きが弱く、遊び駒を攻める面もある。ただ、実際に飛車を持つのは大きい。▲1二歩△同香▲1一飛と後手陣を攻めるのが厳しいからだ。

△4七歩から永瀬は懸命に攻めるが、先手玉はしっかりしている。控室では数人の棋士が検討していたが、後手が勝てないい。というより、先手がどう勝つかが焦点になっていた。指了図から渡辺はスマートに決めた。

（君島俊介）

（指し終わり局面）

旅の案内

旅行企画・実施 京都新聞旅行センター

宿泊

◆立山黒部アルペンルート・雪の大谷と雲上のホテルに泊まる 弥陀ヶ原ホテル1泊

▽6月⑮日 京都駅南口一午前8時半 山科西友前一午前8時50分▽新聞旅行協議会で弥陀ヶ原ホテルを貸切で利用します！立山駅からケーブルカーで美女平へ、貸切の高原バスで弥陀ヶ原へ。専門ナチュラリストが高山植物をめでる散策へご案内。ホテル到着後は星空観察会をお楽しみください。翌日は立山・雪の大谷ウオークと黒部ダムも観光します▽代金33,800～47,800円（1泊3食付き）、立山湧水500㎖1本付き

日帰り

◆THE ICE（ザ・アイス）2018 愛知公演

▽8月4日 京都駅南口一午前7時 四条大宮一午前7時20分▽8月5日 京都駅南口一午前9時 四条大宮一午前9時20分▽愛・地球博記念公園内アイススケート場のアリーナ席にて鑑賞。平昌オリンピック銀メダルの宇野昌磨、金メダルのアリーナ・ザギトワをはじめ、ネイサン・チェン、ボーヤン・ジンら海外選手の他、宮原知子、本田真凜、織田信成など人気のスケーターが集結▽代金28,800円（お弁当とお茶付き）

◆六甲山で鉄板焼の昼食を 六甲山のあじさいと有馬温泉

▽6月20、24、28、30日 四条大宮一午前8時半 京都駅南口一午前9時▽神戸市立森林植物園へ。約350品種5万株のあじさいを観賞します。六甲ガーデンテラスで神戸市内一望、六甲山でラム肉・牛肉など鉄板焼の昼食賞味。その後は有馬温泉へ移動、金の湯・銀の湯2館入湯券を利用しての入湯と、情緒ある温泉街散策▽代金8,480円（昼食付き）

◆舞鶴ひと目10万本のあじさいと人気の観光列車 丹後あかまつ号

▽6月21、23日 京都駅南口一午前7時半 四条大宮一午前7時50分国道中山一午前8時10分 京丹波PA一午前8時40分▽舞鶴自然文化園で、ひと目10万本のあじさい観賞。西舞鶴駅から天橋立駅まで丹後あかまつ号に乗車。天橋立では文殊堂を参拝▽代金9,980円（昼食付き）

霊場巡拝

◆四国八十八ヶ所霊場巡拝第3回

▽6月⑳日 四条大宮一午前7時 京都駅南口一午前7時半▽阿波の国へ。第13番の大日寺から第18番の恩山寺を先達と共に参拝いたします▽代金10,880円（昼食付き）

◆四国八十八ヶ所霊場巡拝第4回

▽7月18日 四条大宮一午前7時 京都駅南口一午前7時半▽阿波の国へ。第19番の立江寺から第22番の平等寺を先達と共に参拝いたします▽代金11,880円（昼食付き）

◆四国八十八ヶ所霊場巡拝第5回

▽8月29日 四条大宮一午前7時 京都駅南口一午前7時半▽阿波・土佐の国へ。第23番薬王寺から第25番津照寺を先達と参拝し、第24番の最御崎寺を参拝、宿坊に宿泊します。翌日は第26番金剛頂寺から第30番の善楽寺を参拝。男女別相部屋制での利用となります▽代金26,880円（1泊4食付き、タクシー代含む）

◆西国三十三カ所霊場巡拝第3回

▽6月⑯、⑳、㉔日 京都駅南口一午前7時半 四条大宮一午前7時50分 山科西友前一午前8時10分▽第13番石山寺、第31番長命寺を参拝し、長浜で昼食。第30番竹生島宝厳寺を先達と参拝▽代金10,980円（昼食付き、タクシー・船代含む）

◆西国三十三カ所霊場巡拝第4回

▽6月23日 7月④、8日 四条大宮一午前7時半 京都駅南口一午前8時▽第20番の善峯寺と第22番の総持寺、第23番の勝尾寺、第24番の中山寺、番外の花山院を先達と共に参拝いたします▽代金10,480円（昼食付き、タクシー代含む）

◆西国三十三カ所霊場巡拝第5回

▽6月30日 7月11日 四条大宮一午前9時 京都駅南口一午前9時半▽第15番今熊野観音寺、第11番上醍醐准胝堂、第10番三室戸寺を先達と共に参拝いたします。宇治で昼食の後は、第12番岩間寺を参拝します▽代金9,980円（昼食付き）

（1人から受け付けいたします。代金税込。○印は催行確定。）

お問い合わせ・お申し込み
観光庁長官登録旅行業第1994号
京都新聞旅行センター 075(256)2233
※旅行条件は別紙資料でご確認下さい
http://www.kyoto-pd.co.jp

講座案内 文化センター

中京区烏丸通夷川上ル
京都新聞ビル南館8階
TEL075(213)8141

◆筆ペン・ボールペン字

基礎的な練習を繰り返しながら、氏名、住所、手紙、のし袋への署名など、最も実用的な字を学びます。仕事帰りの約1時間でレッスンが受講できます。名前の練習から始めて美しい文字を目指しませんか。

▽講師＝中家寛子（水穂会総務・日展作家）

▽日時＝7月12日～9月27日（木）午後6時半～8時

▽受講料1万2960円（3カ月6回・入会金必要）

▽資料代300円

◆かな・実用書

美しい日本語で書かれた詩歌や文章を学びながら、毛筆からボールペン字まで指導します。自分のペースで練習を進めますので、初めての方も経験のある方も参加できます。

▽講師＝木村通子（水穂会副理事長・日展会員）

▽日時＝7月5日～9月27日（木）①午前10時～正午②午後1時～3時

▽受講料各2万4600円（3カ月12回・入会金必要）

▽教材費各300円

◆美しい文字

調和のとれた美しい文字が書けるように、丁寧に指導します。住所や氏名、のし書きや年賀状など、身近に書く文字を筆ペンとボールペンで学びます。

▽講師＝兵道紅琳（暁書法学院講師）

▽日時＝7月12日～9月27日（木）午前10時～正午

▽受講料1万2960円（3カ月6回・入会金必要）

▽初回教材費1500円